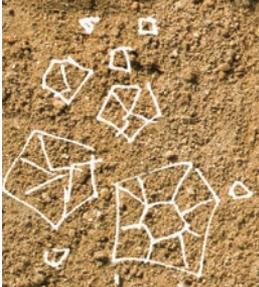




2014.1206  
OPEN  
2015.0331

平城宮跡資料館 三二展示

# 発掘速報展 平城 2014



平城宮跡資料館 三二展示

# 発掘速報展 平城 2014

第1期 2014年12月6日[土]～2015年2月1日[日]

第2期 2015年2月14日[土]～2015年3月31日[火] -予定-

# 平城宮東院地区 (第503次)

調査期間

第503次

2012年12月17日

2013年5月22日



第503次調査区全景 (西から)

## 調査の概要

平城宮には、その東辺に東西約250m、南北約750mの張り出した部分があり、その南半約350mの範囲を「東院地区」と呼んでいます。東院地区には、奈良時代を通じて皇太子や天皇の宮殿がおかれ、儀式や宴会がおこなわれていたことが知られています。奈良文化財研究所では、2006年度より継続的に東院地区の発掘調査を進めており、今回は東院の中心部から西辺部にかけての遺構の様子を明らかにすることを目的としました。調査面積は東西29m、南北35mの1015㎡で、このうち832㎡を新たに調査しました。

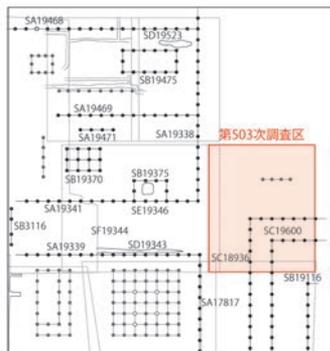
## 調査の結果

① 6時期にわたる建物・塀・溝・壇状遺構など、さまざまな遺構を確認しました。特に、宝亀年間(770～780)頃に東院地区の中心的な施設を区画していた、掘立柱の回廊を検出したことがポイントです。回廊は、梁行が約6mという非常に大規模な単廊形式で、南北方向から東西方向へ曲がることになりました。この時期の東院の中心部は回廊によって区画されており、中心的な施設が調査区の南東側や北東側に位置するということがわかりました。

② 奈良時代の末頃、東院地区には光仁天皇の「楊梅宮」という建物があったと考えられています。楊梅宮は、宝亀4(773)年に高麗朝臣福信により建てられたもので、天皇が正月の節会などの際に、五位以上の貴族たちと宴をする場所でした。今回の調査で見つかった回廊は、この楊梅宮を区画する施設である可能性が高いと考えられます。調査区の南方では、回廊と柱筋を揃える建物が数棟みつかり、これらは楊梅宮を構成する建物とみられます。今後、回廊の内部の建物群や周辺の調査を進めることで、これまで文献でしか知られていなかった楊梅宮の構造が明らかになりそうです。



奈良時代後半の平城宮 (井上和人 『日本古代都城制の研究』 所収図に加筆)



調査区付近の主要遺構配置図 (宝亀年間頃)

## 出土遺物

今回の調査では、口径42.7cm、41.8cmという大型の須恵器の皿、土師器などの土器類が出土しました。また、周辺の調査区と比べて磚の出土量がとても多いことが特徴です。詳しい使用方法はわかりませんが、磚を底に敷いた溝や、磚を使った何らかの施設があった可能性もあります。一方、瓦の出土量は、みつかった建物遺構の数と比べてそれほど多くはありません。このため、ここには総瓦葺ではなく、屋根の棟部分など、一部にのみ瓦を使用した建物が並んでいた可能性が考えられます。

# 西大寺旧境内（第505・521次）

## 調査期間

第505次

2013年2月12日  
2013年4月26日

第521次

2013年12月3日  
2014年2月7日

## 調査の概要

西大寺は、天平宝字8（764）年に称徳天皇の発願により建立された寺院です。創建時の伽藍の大部分は、今は市街地となっています。

西大寺の旧境内は、1955年以来、主に奈良文化財研究所と奈良市教育委員会によって調査がおこなわれています。今回の調査区は、西大寺の中心的な施設であり、2006・2007年の調査で初めて確認された、薬師金堂の近隣に位置します。宝亀11（780）年に成立した、西大寺の詳細な寺院財産目録『西大寺資財流記帳』によれば、西大寺の金堂院には、薬師金堂と弥勒金堂、それらに取り付け軒廊と回廊がめぐっていたとされます。今回の調査では、この金堂院に関する遺構の検出が期待されました。



第505次調査区全景（西から）

## 調査の結果

- ①第505・521次調査区ともに、金堂院に関連する遺構を確認しました。薬師金堂の西妻に取り付け複廊形式の軒廊と西面回廊、東面回廊が検出されたほか、北面回廊や弥勒金堂の位置についても手がかりが得られました。
- ②発掘の成果を『西大寺資財流記帳』の内容と合わせることで、金堂院は東西の幅が約97mであることが確定し、南北の長さについても約117mであったことが推測できるようになりました。また、雨落溝などから出土した瓦の年代により、軒廊や回廊の造営が薬師金堂より遅れることも明らかになりました。
- ③西大寺創建以前の複数の整地面と、それらに伴う掘立柱建物などを確認しました。出土した遺物から、いずれも奈良時代のものと考えられます。調査地の一帯は、平城遷都後から西大寺創建までの間、宅地として活発に利用されていたようです。

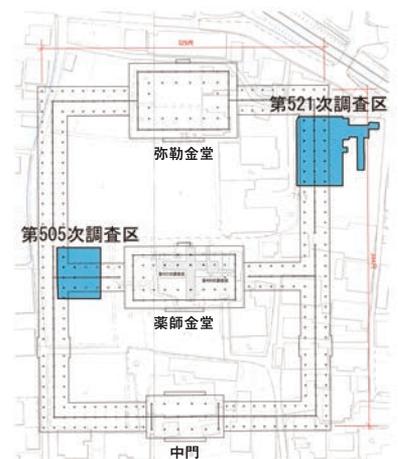


第521次調査区全景（北東から）

## 出土遺物

今回の調査では、瓦磚類が多量に出土し、特に釉薬がかけられた瓦の出土が目立ちました。過去の金堂院周辺の調査でも釉薬がかけられた瓦が多く出土しているので、これらは西大寺金堂院一帯の特徴といえそうです。奈良時代の瓦も数多く出土し、軒丸瓦が130点、軒平瓦が111点、丸・平瓦は合計5トン分に及びます。

他にも、金堂院下層の整地土の中からは、西大寺創建の時期（奈良時代後半）以前の活動を示す遺物が数多く出土しました。それらは、土器類、金が付着した木の棒や紡錘車などの木製品、飾金具や鉄釘などの金属製品と多岐にわたっています。金堂院一帯が寺域ではなくなった後に掘られた井戸からも、漆塗りの皿や素焼きの播鉢などがみつけられました。



西大寺金堂院復元図と調査区の位置



平城宮東院地区出土 須恵器の大型皿(左)・磚(右)



西大寺旧境内出土 施釉瓦磚(左)・金が付着した木の棒(右)

平城宮跡資料館平成26年度ミニ展示

## 『発掘速報展 平城2014』

この展示は、奈良文化財研究所都城発掘調査部が2013年度におこなった発掘調査の成果の一部を紹介したものです。詳細は『奈良文化財研究所紀要2014』をご参照ください。

発行日 2014年12月6日

発行 独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市佐紀町247-1(仮設庁舎)

<http://www.nabunken.go.jp/>

企画編集 奈良文化財研究所 展示企画室

デザイン 市原 夕貴

印刷 株式会社 天理時報社